

【寺坂棚田】

寺坂棚田は、棚田栽培という昔ながらの農業伝統を実現している。日本のような山国では、傾斜地を一連の水平な階段状の地形に変えることにより、耕地面積を最大化することが可能になる。特に稲作ににおいて棚田は必要である。というのも、水田は一年の多くが水に浸かっていなければならないからである。稲作地が平らでないと、水が斜面から流れ出てしまうのである。

秩父市と横瀬町の間に位置する寺坂棚田は、埼玉県で最大の棚田である。約 250 枚の田んぼが 5.5 ヘクタールの扇状地を占め、下から一番上まで 40 メートル続いている。棚田は、横瀬川とその支流の一つである曾沢川に囲まれており、この二つの川は南西で合流している。この扇状地は、約 2 万年前から 3 万年前の最終氷河期に、曾沢川が運んできた堆積物によって形成された河岸段丘であると考えられている。

この地域には、縄文時代（紀元前 14,000～紀元前 350 年）に人類が定住しており、紀元前 2500 年頃の竪穴式住居と石斧の製作跡が、棚田の南側で発見されている。それから何世紀も後の時代、横瀬家の領主がこの地域を治めた。町には今でも名前が刻まれており、墓と 1445 年に建てられた石碑に記録されている。「寺の坂」という意味の寺坂という名前は、棚田の北側付近で見つかった二つの寺の跡のうちの一つに由来しているようである。

そして 20 世紀後半になると、地元の農業従事者の高齢化に伴って、棚田は耕作放棄地となっていた。これは日本の多くの地域にとっても共通の問題である。しかし、2001 年、地元のグループが棚田を活性化するために立ち上がった。彼らは、伝統的な稲作方法を地域に広めるため、新たな半民半官の農地オーナー制度を確立した。

寺坂棚田の風景は、絶えず変化する。それらの外観は季節によって変わり、地元の野生生物に与える生態系も変わる。晩春には、畦道が固められ土が耕される。初夏には、田んぼに水が入られ、苗が植えられる。カエル、トンボ、水鳥がこの人の手につくられた湿地で繁殖し、水面は空の輝きを映す。夏の終わりには、キジが背の高い稲の葉の中に隠れる。秋になると、この緑豊かな風景が一変し、黄金色に実った稲穂がゆらゆらと揺れる。10 月 1 日頃、畦道に真っ赤な彼岸花が咲くと、稲の収穫の準備が整う。農家の人たちは、手鎌で稲を刈り、刈った稲を稲わらで束にする。フタバと呼ばれるこれらの束は、木製の棚に掛けられて、およそ 2 週間太陽の下で乾かされる。

現在この棚田では、幼稚園、小学校、企業、教育機関が、自分たちの区画で稲作を行っており、棚田の風光明媚な美しさが保たれている。白米と黒米の両方が栽培されており、田んぼのオーナーは収穫した米を自分たちで食べたり、地元の小売業者に販売したりしている。